

〔訳注〕

北魏・東魏・西魏・北周の婚姻外交に関する史料訳注

—『魏書』『北史』『資治通鑑』等より—

菅 沼 愛 語

和蕃公主の降嫁政策は、漢・隋・唐が有効活用した外交政策であり、近年では注目も高く、外交上の重要性にとどまらず、経済上、文化上の意義についても幅広く研究がなされている。^①

公主降嫁政策は、じつは北魏・東魏・西魏・北周^②においても頻繁に見られるが、この時代は分裂期ということもあり、婚姻政策も重要な外交戦略として用いられた。例えば、北魏は五胡の諸国（後秦・北涼など）や柔然^③との間で、また、東魏・西魏は柔然との間で、北周は突厥との間で、各々積極的に婚姻を結び、公主を周辺国に降嫁させるだけでなく、周辺国君主の娘も娶り、婚姻同盟も利用しつつライバル国に対抗した。^④

筆者はこれまで、和蕃公主研究の基礎作業として漢・隋・唐の和蕃公主に関する諸史料（『史記』『隋書』『旧唐書』『資治通鑑』等）の訳注を行った。^⑤ 本稿では北魏・東魏・西魏・北周の婚姻外交に注目し、関連史料の訳注を試みる。北魏・東魏・西魏・北周の婚姻外交や公主降嫁については、『魏書』蠕蠕伝・吐谷渾伝・高麗伝・沮渠蒙遜伝、『北史』蠕蠕伝、『周書』突厥伝^⑥、『資治通鑑』等に記載があるが、記述内容が重複する場合には翻訳を省略することもある。使用するテキストは、中華書局の標点本（魏書一九七四年版、北史一九七四年版、周書一九七一年版、資治通鑑一九五六年版）な

どである。また、東魏と柔然・吐谷渾との婚姻状況、西魏と柔然の婚姻状況をまとめたものが【系図】である。

I 北魏

一、道武帝の時代

北魏以前の代国時代から、皇帝は諸族や周辺国に対して公主を降嫁させ、周辺国君主の娘も妃として娶っていたが、北魏の初代道武帝は、漢高祖が開始した和蕃公主の降嫁政策に倣って、改めて北魏の公主降嫁政策を定め、臣下への降嫁を止めて、周辺国や帰順した投降者への降嫁を開始した。⁸

(一) 道武帝による公主降嫁の開始

・『魏書』卷二四、崔玄伯伝〔北史〕卷二二崔宏伝は同文なので省略

太祖道武帝は、かつて崔玄伯を召して『漢書』を講義させたことがあったが、婁敬（劉敬）が漢の高祖を説得して魯元公主を匈奴に嫁がせようとした話⁹に講義が及ぶと、道武帝は「良計であるな」と言い、しばらくの間、感心していた。こういうわけで、道武帝は公主達をみな、北魏に帰順した国家や投降した者（原文は賓附之國¹⁰）に対して降嫁させることにした。しかし、北魏に仕える臣下（原文は朝臣）の子弟に対しては、たとえ名族の男子であっても、また才知や徳行の優れた男子であったとしても、公主を娶ることはできなかった。

・『冊府元龜』卷九七八、外臣部和親一

北魏の道武帝の時、吏部尚書の崔玄伯を召して『漢書』を講義させた。婁敬（劉敬）が漢の高祖を説得して魯元公主を匈奴に嫁がせようとした話に講義が及ぶと、道武帝は「良計であるな」と言い、しばらくの間、感心していた。こういうわけで道武帝は公主達をみな北魏に帰順した国家や投降した者に降嫁させることにした。しかし、北魏に仕える

臣下の子弟に対しては、たとえ名族の男子であっても、また才知や徳行の優れた男子であったとしても、公主を娶ることとはできなかつた。このとき、柔然の閻大肥が一族を率いて北魏に帰順したので、道武帝は華陽公主を閻大肥に降嫁させた。華陽公主が亡くなると、また、後妻として閻大肥に漣沢公主を降嫁させた。

(二) 公主の降嫁

道武帝は、柔然から亡命して北魏に帰順した閻大肥に対し、先妻として華陽公主、後妻として漣沢公主を降嫁させた。閻大肥は、道武帝、明元帝、太武帝に代々仕え、柔然や夏との戦いなどで活躍した。

(1) 華陽公主・華陰公主〔北魏に投降した柔然人・閻大肥に降嫁〕

・『魏書』卷三十、閻大肥伝〔『北史』卷二〇閻大肥伝は同文なので省略〕

閻大肥は柔然人であった。太祖道武帝の時代、弟の大壺倍頤とともに一族を率い北魏に(亡命し)帰順した。道武帝は喜び、閻大肥に娘の華陰公主を娶らせた。：華陰公主が亡くなると、閻大肥はまた後妻として漣沢公主を娶った。

(2) 漣沢公主〔北魏に投降した柔然人・閻大肥に後妻として降嫁〕

・『魏書』卷三十、閻大肥伝〔『北史』卷二〇閻大肥伝は同文なので省略〕

華陰公主が亡くなると、閻大肥はまた(後妻として)漣沢公主を娶った。

(三) 周辺国から道武帝に嫁いだ女性

道武帝は、後燕の王・慕容宝の娘を娶り、皇后とした。

・『魏書』卷十三、皇后伝一、道武皇后慕容氏〔『北史』卷十三道武皇后慕容氏伝は同文なので省略〕

道武帝の皇后の慕容氏は、後燕の第二代皇帝・慕容宝の末娘である。道武帝は後燕の都・中山(河北省定州)を平定すると、慕容氏を後宮に入れて寵愛した。

二、明元帝の時代

明元帝の時代には、周辺国の君主や周辺国からの投降者に対する公主の降嫁はなかったが、明元帝自身は、後秦の第二代皇帝・姚興の娘西平公主を娶った。

・『魏書』卷十三、明元昭哀皇后姚氏伝（『北史』卷十三昭哀皇后姚氏伝は同文なので省略）

明元帝の妻の昭哀皇后の姚氏は、後秦の第二代皇帝・姚興の娘で、姚興によって西平長公主に封じられた。太宗明元帝は礼儀を尽くして西平長公主を娶り、のちに夫人とした。

・『魏書』卷九五、姚興伝（『北史』卷九三姚興伝は同文なので省略）

神瑞二年（四一五）、後秦の姚興が散騎常侍の東武侯の姚敞、尚書の姚泰奉を北魏に派遣し、西平公主を太宗明元帝に妻として奉った。明元帝は、礼を尽くして公主を娶った。

三、太武帝の時代

太武帝は周辺諸国との間で精力的に婚姻外交を展開し、公主を降嫁させるとともに、自らも周辺国君主の娘を娶り、二重の婚姻関係で親善強化を図った。例えば、柔然の呉提に西海公主を降嫁させると同時に、太武帝も呉提の妹を娶って左昭儀となし、北涼の沮渠牧犍に武威公主を降嫁させるとともに、太武帝も興平公主（牧犍の妹）を娶って右昭儀とした。また、成婚に至らなかったが、太武帝は宋の文帝との間で三度も婚姻外交を行った。

（一）公主の降嫁

（1）始平公主（夏の赫連昌に降嫁。四二八年、神麿元年）

・『魏書』卷九五、赫連昌伝（『北史』卷九三赫連昌伝は同文なので省略）

侍御史の安頡が、夏の王赫連昌¹²⁾を捕えた。太武帝は侍中の古弼を派遣して赫連昌を迎えさせ、都の平城に到着すると、西にある宮門の内側に屋敷を構えさせ、天子の乗り物の添え馬を授けた。また、太武帝は勅書を下し、赫連昌に始平公主を娶せ、假常忠將軍、会稽公となし、秦王に封じた。しかし、赫連昌は謀反に連座したので誅殺された。

・『資治通鑑』卷二二一、宋紀三、文帝元嘉五年(四二八、北魏の神麴元年) 条

神麴元年(四二八)三月辛巳の日、赫連昌が平城に到着したので、北魏の太武帝は：妹の始平公主を赫連昌の妻とした。

(2) 西海公主〔柔然の呉提に降嫁。四三四年、延和三〕

・『魏書』卷一〇三、蠕蠕伝〔『北史』卷九八蠕蠕伝は同文なので省略〕

延和三年(四三四)二月、太武帝は呉提¹³⁾に西海公主を降嫁させ、また柔然に使者を派遣し、太武帝自身が呉提の妹を娶って夫人となし、その後、左昭儀の位に進めた。

・『資治通鑑』卷二二一、宋紀四、文帝元嘉十一年(四三四年、北魏の延和三年) 条

北魏の太武帝は、西海公主を柔然の勅連可汗・呉提の妻とした。

(3) 武威公主〔北涼の沮渠牧犍に降嫁。四三七年、太延三〕

太武帝の妹武威公主は、北涼の沮渠牧犍に降嫁し、二人の娘も儲けたが、牧犍は兄嫁の李氏と密通し、李氏は公主の毒殺を画策した。太武帝は北涼に親征したが、その際、公主が太武帝の北涼攻撃を援護したので、太武帝は公主を寵愛し、牧犍の死後、公主を李蓋と再婚させた。

・『魏書』卷三七、司馬楚之伝〔『北史』卷二九司馬楚之伝は同文なので省略〕

司馬楚之は、のちに諸王の娘の河内公主を娶り、息子の金龍を生んだ。：司馬金龍は、のちに沮渠氏を娶り、徽亮を

生んだ。この沮渠氏という女性は、河西王・沮渠牧犍の娘であり、太武帝の妹の武威公主が生んだ娘であった。

・『魏書』卷七七、高崇伝（『北史』卷五十高崇伝は同文なので省略）

高崇は：勃海の薩の人であった。：高崇の父の潜は、顯祖・献文帝の時代に初めて北魏に帰順し：遼東に住んだ。献文帝は勅書を下し、沮渠牧犍の娘を高潜に妻として賜り、武威公主に封じた。：初め、高崇の母方の叔父が罪に連座して誅殺された。武威公主は、生家の血筋が断絶してしまふことに心を痛め、ついに高崇に沮渠牧犍の後を継がせ、姓を沮渠に改めさせた。

・『魏書』卷八三、外戚伝上、李惠伝（『北史』卷八十李惠伝は同文なので省略）

李惠は、思皇后（献文帝の妃で、孝文帝の母）の父である。父親の李蓋は：左將軍、南郡公をつとめた。初め、太武帝の妹の武威長公主は、かつての北涼王・沮渠牧犍の妻であった。太武帝が北涼の都・涼州（甘肅省）を平定した際、武威長公主が密かに計略を用いて太武帝の北涼攻撃を大いに助けたので、太武帝は公主をことのほか寵遇した。太武帝は勅書を下し、李蓋に武威長公主を娶らせた。李蓋の妻與氏は、このため家を出されて離別させられた。

・『魏書』卷九九、沮渠蒙遜伝（『北史』卷九三沮渠蒙遜伝は同文なので省略）

沮渠牧犍は、太武帝の妹の武威公主を娶り、宰相の宋繇を派遣し、上表して礼を述べ、馬五百頭と黄金五百斤を献上した。宋繇はまた表を奉り、「武威公主と、牧犍の母君に后妃の称号を定めていただきたい」と請願した。北魏の朝廷では議論し、「母は子によって尊ばれ、妻は夫の爵に従うと申します。牧犍の母は河西国太后とし、武威公主は河西王国の中では王后と称するのがよろしいでしょう。ただ、平城では従来通り公主と称してはいかがでしょうか」と答えた。太武帝は勅書を下し、それに従った。：牧犍は、北魏の藩屏と称して朝貢を続けたが、実際には背信行為が多かった。そこで太武帝は北涼への親征を決め、公卿達に勅書を下し、牧犍を詰問する書状¹⁴を作らせ、「：牧犍はすでに夫婦の体

裁をはずれ、婚姻の義を尊重せず、公に酖毒を用いて武威公主の殺害を企てた。それが罪の第十一である。…」と述べた。…牧健は兄嫁の李氏と不倫関係を結び、兄弟三人も次々と彼女を愛妾とした。李氏と牧健の姉が共謀し、武威公主の毒殺を企てたが、太武帝が解毒のための医師を駆伝の馬によって涼州に派遣して公主を救わせたので、公主は治癒した。…この年（太平真君八年＝四四七）、ある人が「牧健は、いまでも北涼時代の旧臣民と交流しあい謀反を企てていまず」と密告したので、太武帝は司徒の崔浩に勅書を下し、妻の武威公主の館で牧健に死を賜わった。牧健は、武威公主と長い時間をかけて訣別の辞を述べたあと自殺した。…武威公主が亡くなった時、勅書を下して牧健と合葬させた。武威公主には息子がおらず、娘（司馬金龍の妻沮渠氏と、高潜の妻武威公主）がいた。国甥（皇室の女婿）が親しく寵愛されていたので、献文帝は、公主の娘（高潜の妻）に母の爵位を継承させて武威公主とした。

・『資治通鑑』卷二二三、宋紀五、文帝元嘉十四年（四三七年、北魏の太延三年）条

北魏の太武帝が、妹の武威公主を河西王の沮渠牧健の妻とした。河西王牧健は宋繇に表を奉らせ、平城を訪問させて太武帝に感謝を述べるとともに、武威公主の佳名をたずねた。太武帝が群臣に議論させると、群臣はみな「母は子によつて尊ばれ、妻は夫の爵位に従うと申します。牧健の母親の佳名は河西国太后でございます。武威公主は河西王国では王后と称し、平城では公主と称するのがよろしいでしょう」と言ったので、太武帝は群臣の意見に従った。

・『資治通鑑』卷二二五、宋紀七、文帝元嘉二十四年（四四七年、北魏の太平真君八年）条

三月、太武帝は崔浩を館に派遣し、牧健に死を賜った。

(4) 後仇池国の楊保宗に降嫁した公主

太延五年（四三九）頃、後仇池王の楊保宗が、叔父の楊難当に国を奪われて北魏に亡命してきたので、太武帝は保宗に公主を娶らせ、後仇池攻略に活用した。しかし、楊保宗が反乱を企て、公主も叛旗を翻すよう夫に勧めたので、太武

・『魏書』卷一〇一、氏伝〔北史〕卷九六氏伝は同文なので省略

後仇池の王・楊保宗は（叔父の楊難当に王位と国を奪われたので、兄の保頭とともに平城に亡命し、北魏に帰順した。そこで太武帝は（太延五年、四三九年）¹⁶、保宗に征南大將軍・秦州牧・武都王の位を授け、公主を降嫁させた。…これ以前、太武帝は楊保宗に勅書を下し、上邦（甘肅省天水市）に駐屯させ、また勅書を出して略谷に駐屯させて仇池を回復させた。しかし楊保宗の弟の文徳が先に仇池の氏に逃亡し、保宗を説得して反乱を起こすよう命令した。このことが露見したので、河間公の齊は楊保宗を捕縛し、平城に送った（四四三年）¹⁷。そこで太武帝は楊難当に勅書を下し、楊保宗を殺害させた。氏、羌は、楊文徳を擁立し、濁水に駐屯した。楊文徳は自ら征西將軍・秦河梁三州牧・仇池公を称し、宋の文帝劉義隆に対して援軍を求めた。宋の文帝は楊文徳を武都王に封じ、偏將の房亮之らを派遣して楊文徳を助けさせた。しかし河間公の齊はこれを迎撃し、房亮之を捕縛した。…太武帝は、淮陽公の皮豹子らに勅書を下し、諸軍を率いさせて楊文徳を討伐させた。楊文徳が漢中に逃げたので、皮豹子は、文徳の妻子・部下・食糧、それに楊保宗の妻であった公主を接収し、平城に送った。公主は、太武帝から死を賜った。初め、公主は夫の楊保宗に対し、北魏に叛旗を翻すよう勧めた。このとき、あるひとが公主に対し、「父母の国に叛かれるのは、なぜですか」とたずねると、公主は、「礼に従えば、女は嫁げば夫によつて榮え、有事の際には一方に立てこもり、拠点となつて防戦するものです。わたしは一国の母なので、責任の重みは小さな県の公主とは比較になりません」と言った。これによつて公主は太武帝を怒らせ、死罪になつたのである。

・『資治通鑑』卷一二五、宋紀七、文帝元嘉二十四年（四四七年、北魏の太平真君八年）～元嘉二十五年（四四八年、太平

真君九年 条

元嘉二十四年(四四七)：楊文徳は葭蘆城に拠り、氐・羌を招集したので、武都などの五つの郡の氐はみな文徳に従った。元嘉二十五年(四四八)春正月、北魏の仇池鎮將の皮豹子が諸軍を率いて楊文徳を攻撃した。楊文徳の軍勢は敗北し、城を放棄して漢中に逃走した。皮豹子は、文徳の妻子、部下、兵糧、それに楊保宗に降嫁した北魏の公主を接収して、北魏の都に帰還した。初め、楊保宗が北魏に叛旗を翻そうとしたとき、公主は反乱を起こすよう勧めた。あるひとが「なぜ父母の国に叛くのですか」とたずねると、公主は「有事の際には、一国の母としての責務を果たさねば。小さな県の公主と比較できませんか」とこたえたので、北魏の太武帝は公主に死を賜った。

(二) 周辺国から太武帝に嫁いだ女性

(1) 太武帝の皇后・赫連皇后(赫連勃勃の娘)

『魏書』卷十三、太武皇后赫連氏伝(『北史』卷十三太武皇后赫連氏伝は同文なので省略)

太武帝の皇后赫連氏は、夏の王赫連屈丐(赫連勃勃)の娘である。太武帝は夏の都統万(陝西省榆林市)を平定したとき、赫連氏と二人の妹をもとに娶って貴人とした。その後、赫連氏を皇后に立てた。

・『南齊書』卷五七、魏虜伝

太武帝(原文は仏狸)は赫連勃勃の子の昌を攻め破り、勃勃の娘を娶って皇后とした。

(2) 太武帝の左昭儀(柔然可汗・呉提の妹)

『魏書』卷四上、世祖紀上、延和三年(四三四) 条

延和三年(四三四)二月丁卯の日、柔然の呉提が、妹を太武帝に対して妻として奉り、さらに異母兄の秃鹿傀、側近数百人を派遣して北魏に朝貢させ、馬二千頭を献上した。

・『魏書』卷一〇三、蠕蠕伝（『北史』蠕蠕伝は同文なので省略）

延和三年（四三四）二月、太武帝は呉提に西海公主を降嫁させ、また柔然に使者を派遣し、太武帝自身が呉提の妹を娶って夫人となし、その後、左昭儀の位に進めた。

・『資治通鑑』卷二二二、宋紀四、文帝元嘉十一年（四三四年、北魏の延和三年）条

北魏の太武帝は、西海公主を柔然の勅連可汗・呉提の妻とした。また、太武帝は呉提の妹を後宮に入れて夫人となすことにし、潁川王の提に、呉提の妹を迎えに行かせた。延和三年（四三四）丁卯の日、呉提が異母兄の秃鹿傀に妹を送らせ、馬二千頭を献上した。太武帝は、呉提の妹を左昭儀とした。

③ 太武帝の右昭儀・興平公主（北涼の王・沮渠牧犍の妹）

・『魏書』卷五二、宋繇伝（『北史』卷三四宋繇伝は同文なので省略）

沮渠牧犍は、宋繇を左丞となし、妹の興平公主を平城に送らせた。

・『魏書』卷九九、沮渠蒙遜伝（『北史』卷九三沮渠蒙遜伝は同文なので省略）

沮渠蒙遜の第三子の牧犍は、夏の王位を継いで自ら河西王と称し、使者を派遣して太武帝の命令を請うた。これ以前、太武帝は李順を北涼に派遣し、沮渠蒙遜の娘を迎えて夫人にしようとしたが、たまたま蒙遜が亡くなったので、牧犍が蒙遜の遺志を継ぎ、妹を平城に送り届けた。牧犍の妹は、太武帝より右昭儀の位を授かった。…太武帝は旅人から曇無識の術の噂を聞き、北魏に召そうとしたが、沮渠蒙遜は曇無識を差し出そうとしなかった。やがて曇無識の所行が暴露されると、沮渠蒙遜は曇無識を訊問の末、殺害した。太武帝はそのことを聞き知ると、昭儀沮渠氏（牧犍の妹）に死を賜い、一族を誅殺した。

・『資治通鑑』卷二二二、宋紀四、文帝元嘉十年（四三三年）、北魏の延和二年 条

これ以前、北魏の太武帝は李順を派遣して武宣王・沮渠蒙遜の娘を迎えさせ、夫人にしようとした。たまたま沮渠蒙遜が亡くなったので、息子の牧犍は先王の遺志であると称し、左丞の宋繇を派遣して妹の興平公主を北魏に送らせた。興平公主は太武帝の妻となり、右昭儀の位を授かった。

・『資治通鑑』卷二二五、宋紀七、文帝元嘉二十四年（四四七年）、北魏の太平真君八年 条

北魏の役人が沮渠牧犍の屋敷を探索し、牧犍が隠していた物を押収した。太武帝は激怒し、沮渠昭儀に死を賜り、あわせて一族も誅殺した。

(4) 太武帝の左昭儀馮氏（北燕の王・馮文通の娘）

・『魏書』卷十三、文成文明皇后馮氏伝（『北史』卷十三文明皇后伝は同文なので省略）

太武帝の左昭儀の馮氏は、文明皇后（文成帝の皇后・馮太后）の叔母である。優雅で、母親の徳を持ち、慈愛をもつて文明皇后を養育し、教え諭した。

・『魏書』卷八三、外戚伝、馮熙伝（『北史』卷八十馮熙伝は同文なので省略）

馮熙は…文成帝の妻・文明太后の兄である。…馮熙の叔母は、以前、後宮に入内し、太武帝の左昭儀になった。

・『魏書』卷九七、馮文通伝（『北史』卷九三北燕馮弘伝は同文なので省略）

馮文通（馮弘）は、北燕の初代の王・馮拔の末弟であった。…延和元年（四三二）、太武帝が自ら馮文通を討伐したので、馮文通は籠城して防戦に徹した。…馮文通は、尚書の高顛を北魏に派遣して許しを請い、末娘を太武帝の後宮に入内させたいと請願した。

(三) 太武帝と宋文帝の間で行われた婚姻に関する外交交渉

太武帝と宋の文帝との間では、成婚には至らなかったものの、三度（四三一年、四三三～四三七年、四五〇年）結婚話が持ち上がり、宋文帝の娘が太武帝の皇太子に降嫁することや、太武帝の娘が宋文帝の三男劉駿に嫁ぐことなどが提議された。しかし、文帝による求婚拒絶や文帝の娘の死去などもあって婚姻は成立しなかった。特に注目すべきは三度目（四五〇年）の外交交渉で、このとき太武帝は宋に親征して長江北岸まで迫っており、北魏と宋の間では通婚も視野に入れた和平の道が模索されたのである。ただ史書によって北魏側と宋側の言い分が異なっており、興味深いので、関連史料を以下にあげる。

(1) 四三二年（北魏の神麴四年、宋の元嘉八年）閏六月、太武帝の通婚請願

・『宋書』卷九五、索虜伝

その後、北魏の太武帝が、また使者を派遣して友好関係の樹立を望み、さらに婚姻の締結も請願したので、宋の太祖文帝は、そのたびに曖昧な返事をして求婚に応じなかった。

・『資治通鑑』卷二二二、宋紀四、元嘉八年（四三二年、北魏の神麴四年）閏六月条

元嘉八年（四三二）閏六月乙未の日、北魏の太武帝が散騎侍郎の周紹を宋に派遣し、貢物を献上して通婚を請願したが、宋の文帝は曖昧な返答をして求婚に応じなかった。

(2) 四三三年～四三七年（北魏の延和二～太延三年、宋の元嘉十～十四年）太武帝の通婚請願

・『魏書』卷九七、劉義隆伝

北魏の延和二年（四三三年、宋の元嘉十年）二月、太武帝は勅書を下し、散騎常侍の宋宣を宋の文帝・劉義隆のもとに遣わし、皇太子のために婚姻を結ばせようとした。…太延三年（四三七年、宋の元嘉十四年）三月、宋の文帝は散騎常侍

の劉熙伯を北魏に朝貢させ、さらに結納について議論させた。しかし同年六月、文帝の娘が亡くなったので、北魏と宋の婚姻は成立しなかった。

・『資治通鑑』卷二二二、宋紀四、文帝元嘉十年（四三三年）、北魏の延和二年 二月条

二月壬午の日、北魏の太武帝が：散騎侍郎の宋宣を宋に派遣して礼物を献上し、さらに太子晃のために婚姻を請願した。しかし文帝は曖昧な返答をした。

・『資治通鑑』卷二二三、宋紀五、元嘉十四年（四三七年）、北魏の太延三年）三月条

元嘉十四年（四三七）宋の文帝は、散騎常侍の劉熙伯を北魏に行かせ、結納について議論させた。たまたま文帝の娘が亡くなったので、宋と北魏の婚姻は成立しなかった。

③ 四五〇年（北魏の太平真君十一年、宋の元嘉二十七年）十二月、太武帝と宋文帝の外交交渉

・『宋書』卷七一、江湛伝

元嘉二十七年（四五〇）：宋の文帝は国の総力をあげて北伐を行おうとしたが、朝廷はこぞって反対した。その中で、ただひとり江湛だけが文帝の北伐に賛成した。北魏の太武帝の軍勢が瓜歩（江蘇省）に到達したので、文帝は領軍將軍の劉遵考に軍を率いさせ、太武帝の軍勢を迎撃させるために長江の畔まで出撃させ、江湛に軍の指揮と処置も一任させた。このとき太武帝が使者を派遣して婚姻を請願した。そこで文帝は、太子の勅らを集め、北魏との婚姻について議論させた。みな北魏に婚姻を許可するのがよろしいでしょうと言ったが、江湛は「夷狄は信用できません。婚姻を許可しても利益はありません」と言って北魏との通婚に反対した。

・『宋書』卷九五、索虜伝

元嘉二十七年（四五〇）：北魏の太武帝拓跋燾は、瓜歩山を穿って曲がりくねった道を作り、山の頂きに毛織物で天

幕を築いた。…太武帝は使者を派遣し、宋の太祖文帝に対して駱駝と名馬を贈って和睦を求め、通婚を請願した。そこで文帝は、奉朝請の田奇を北魏の陣営に派遣し、珍しい美味な食べ物を送った。…太武帝は返答せず、手で天を指し示し、それから田奇に向かって自分の孫を指し示し、「ここまで攻め込んだのは、功名を立てたいと望んだことだけが理由ではない。実は、宋と婚姻を通じて親族関係を結ぶことが望みだったのだ。もしも交流することができれば、いまから北魏と宋は互いに二度と、いささかなりとも侵犯することはないであろう」と言った。また、太武帝は自分の娘を文帝の三男・劉駿（原文は世祖。つまり後の孝武帝）に嫁がせたいと請願した。

・『魏書』卷四下、世祖紀下、太平真君十一年（四五〇）、宋の元嘉二十七年（四五〇）十二月条

太平真君十一年（四五〇）十二月甲申の日、宋の文帝・劉義隆が使者を北魏に派遣し、百頭の犠牲獣を献上し、特産物も献上すると、自分の娘を太武帝の孫に対し妻として進め、和睦したいと請願した。しかし太武帝は、遠征中の婚礼は礼に外れた行いであると思なし、文帝に対して和睦することは許可したが、婚姻は許さなかった。

・『魏書』卷九七、劉義隆伝

宋の文帝劉義隆が黄延年を北魏の陣地に朝貢させ、百頭の犠牲獣を献上し、特産品を貢いで和睦を請願し、公主を太武帝の皇孫に対して妻として進めさせた。しかし、太武帝は遠征中に婚姻を結ぶことは礼に外れることだと見なし、和睦は認めたが、婚姻は許可しなかった。

・『資治通鑑』卷二二五、元嘉二十七年（四五〇）年、北魏の太平真君十一年）条

元嘉二十七年（四五〇）北魏の太武帝は瓜步山を穿ち、曲がりくねった道を作り、山の頂きに毛織物で天幕を築いた。…太武帝は宋に使者を派遣し、文帝に対して駱駝と名馬を贈って和睦を求め、通婚を請願した。文帝は奉朝請の田奇を太武帝のもとに派遣し、珍しい美味な食べ物を送った。…太武帝は返答せず、手をあげて天を指さし、自分の孫を田奇

に示すと、「わたしは遠方よりここまで来たが、功名を立てたいと望んだわけではない。実は、友好関係を継続して民を安んじ⁽¹⁸⁾、宋との間で婚姻による親族関係を末永く結びたいと考えているのだ。もしも文帝が娘を、わが孫の妻となし、わたしが自分の娘を武陵王（文帝の三男劉駿、後の孝武帝）の妻とするならば、いまより北魏の軍馬が南を振り返ることは二度とないだろう」と言った。田奇が建業に帰還し、太武帝の言葉を報告すると、文帝は太子の劬や群臣を集め、北魏との婚姻について議論させた。みなこぞって北魏に婚姻を許可するのがよろしいでしょうと進言したが、江湛は「夷狄には親愛の情というものがありません。婚姻を許可しても利益はありません」と言って北魏との通婚に反対した。：北魏もまた、ついに宋との婚姻を成立させることはなかった。

四、献文帝の時代

成婚は実現しなかったが、献文帝は、柔然可汗の予成、高句麗王の高璉（長寿王）との間で婚姻のための交渉を行っている。

(1) 柔然

・『魏書』卷一〇三、蠕蠕伝（『北史』蠕蠕伝は同文なので省略）

延興五年（四七五）、柔然の可汗・予成⁽¹⁹⁾が婚姻を結びたいと請願したが、役人たちは予成が頻繁に辺境の塞を襲撃するので、「柔然からの使者を遮断し、軍隊を派遣して柔然を討伐なさいますように」と請願した。だが献文帝は「柔然は、たとえて言えば禽獣のようなものであり、貪欲で不義理である。しかし朕は信頼と誠意によって柔然を待遇すべきであると考える。柔然からの婚姻の申し出を拒絶してはならない。予成が以前に犯した過ちを知って後悔し、使者を派遣して和平を願い、婚姻を請願しているのに、どうして、その誠意に応えないでいられようか」と言い、勅書を下し、

予成にこたえて、「議論している結婚話は、いまその一端が始まったばかりであり、物事の道理を検討しても、適切な政策であるとはまだ言えない。そもそも『易経』咸では、婚姻の際には男が女にへりくだるものであると説いて、易理を明らかにしている。初めて婚姻を結ぶとき、『儀礼』の士昏礼によれば、婚姻儀礼は六礼に従って、まず男の方から結納品を贈ること（納采²⁰）が尊ばれる。これは君子が人倫のもとを重んじる理由である。その初めを尊重しなければ、その終わりも困難なものとなる」と言った。しかし、予成は常に、偽り、欺くことを考えたので、献文帝の時代には二度と求婚しなかった。

（2）高句麗

・『魏書』卷一〇〇、高麗伝（『北史』卷九四高麗伝はほぼ同文なので省略）

文明太后は、献文帝の後宮の妃の数がまだ揃っていませんでしたので、高句麗王の高璉（長寿王²¹）に勅書を下し、「娘を献文帝の後宮に差し出すように」と命令した。高璉は上表文を奉り、「娘はすでに嫁ぎましたので、弟の娘を代わりに差し出して、ご命令に応えたいと存じます」と言った。北魏の朝廷はこれを許可し、安楽王の真、尚書の李敷らを高句麗の国境まで行かせ、高璉に結納品を送らせることにした。しかし高璉は臣下達の意見に惑わされて、「北魏は昔、北燕の馮氏と婚姻を結んでからすぐに北燕を滅ぼした²²。殷鑑遠からずと申すように、手本とすべき教訓は身近にある。方便を用いて北魏との婚姻を辞退するのがよかろう」と言い、ついに上書して「娘はすでに亡くなった」と、偽りを言った。北魏の朝廷は高璉の上奏が嘘ではないかと疑い、また仮散騎常侍の程駿を高句麗に派遣して高璉を厳しく問いただし、「もし娘が明らかに亡くなったのであれば、改めて高句麗王の一族の中から娘を選んで、妻として北魏に差し出します」と言わせた。また、高璉は「もし陛下が、わたしの以前の過ちをお赦しくださるなら、謹んで詔勅にお応え致します」と言った。しかし、たまたま献文帝が崩御したので、この結婚話は中止になった。

(二) 柔然との婚姻

(一) 蘭陵公主(常山王の妹)が柔然の菴羅辰(阿那瓌の太子)に降嫁(五四一年、興和三)

・『魏書』卷一〇三、蠕蠕伝

北魏の太昌元年(五三二)六月、柔然の阿那瓌が、烏句蘭樹什伐らを朝貢させるとともに、長男のために、孝武帝に對して公主の降嫁を請願した。永熙二年(五三三)四月、孝武帝(原文は出帝)は勅書を下し、范陽王誨の長女琅邪公主を柔然に降嫁させることを許可した。しかし結婚が成立しないうちに、孝武帝は(宇文泰に迎えられて)関中(長安)に入ってしまった。そこで、高歡(原文は斉の献武王)は使者を柔然に派遣し、阿那瓌を説得した。阿那瓌も使者を東魏に派遣して朝貢し、求婚した。高歡は四方の異民族を臣従させたいと考えていたので、常山王の妹の樂安公主を柔然に降嫁させることとし、改めて蘭陵公主と名づけた。阿那瓌は馬千頭を進呈して結納の品とし、蘭陵公主を迎えた。東魏の孝静帝は宗正の元寿に勅書を下し、蘭陵公主を送らせて柔然の地に赴かせた。

・『北史』卷九八、蠕蠕伝

張徽纂が高歡(原文は斉の神武)の意見を告げると、阿那瓌は大臣を召して相談し、東魏に忠誠を誓い、俟利莫何莫縁、游大力らを派遣して朝貢させ、息子の菴羅辰のために婚姻を請願した。東魏の孝静帝は、散騎常侍、太府卿羅念、兼通直散騎常侍、中書舍人穆景相らに勅書を下し阿那瓌のもとに派遣した。東魏の興和二年(五四〇)八月、阿那瓌は、莫何の去折豆、渾十升らを派遣して東魏に朝貢させ、また通婚を請願した。高歡が孝静帝に對し「阿那瓌の希望を認め、四方の異民族を臣従させたい」と請願したので、孝静帝は勅書を下し、常山王鷹の妹の樂安公主を柔然に降嫁させることを許し、改めて蘭陵郡長公主に封じた。十二月、阿那瓌はまた、折豆、渾十升を東魏に派遣し、通婚を請願させた。興和三年(五四二)四月、阿那瓌は、吐豆登郁久闕警渾、俟利莫何折豆、渾侯煩らに馬千頭を奉らせ、結納品となすと、

孝静帝に対し、「公主を妻に迎えたい」と請願した。そこで孝静帝は勅書を下し、兼宗正卿元壽、兼太常卿孟韶らに蘭陵公主を柔然に送らせ、晋陽（山西省太原）から北に向かわせた。必要な品は高歓が親しく自ら準備し、すべて豊富で美しかった。阿那瓌は吐豆登郁久闕匿伏、俟利阿夷普掘、蒲提棄之伏らを派遣し、蘭陵公主を新城の南で迎えさせた。六月、高歓は阿那瓌が信用しないことを憂慮し、また国事もいつそう重大となったので、自ら蘭陵公主を楼煩（山西省）の北まで送り、阿那瓌の使者達を接待してねぎらうことは、みな手厚かった。阿那瓌はたいそう喜び、これ以降、東魏に対して朝貢をつづけた。

・『資治通鑑』卷一五七、梁紀十三、武帝大同元年（五三五年、東魏の天平二年）条

柔然の頭兵可汗・阿那瓌が東魏に求婚したので、宰相の高歓は、常山王の妹を蘭陵公主となして可汗の妻とした。

(2) 柔然の隣和公主（阿那瓌の孫娘）が高湛（高歓の子）に嫁ぐ〔五四二年、興和四〕

・『北齊書』卷七、武成帝紀（『北史』卷八齊本紀下世祖武成帝紀は同文なので省略）

高歓は、ちやうど遠方の国々を懐かせたいと考えていたので、息子の高湛のために柔然の太子菴羅辰（阿那瓌の子）の娘を娶らせ、隣和公主(25)と名づけた(26)。

・『北史』卷九八、蠕蠕伝

東魏の興和四年（五四二）、阿那瓌は孫娘を隣和公主と名づけ、高歓の第九子・長広公高湛の妻にしたいと請願した。孝静帝は勅書を下し、高湛と隣和公主を結婚させることにした。阿那瓌は吐豆登の郁久闕譬掘、俟利莫何の游大力を東魏に派遣し、隣和公主を晋陽に送らせた。

(3) 柔然の蠕蠕公主(阿那瓌の娘)が東魏の高歓に嫁ぐ〔五四五年、武定三〕

・『北史』卷十四、后妃伝下、蠕蠕公主伝

蠕蠕公主は、柔然の可汗・郁久閭阿那瓌の娘である。柔然の勢力が盛んで、西魏と和親し、連合して東魏の討伐を試みたので、高歓は西魏と柔然の連合を憂慮し、杜弼を柔然に派遣して、後継ぎのために通婚を請願した。すると阿那瓌は、「高王(高歓)自らが娶るのであれば結婚を許可しよう」と言った。高歓が決断しかねていると、腹心であり義兄でもある尉景、妻の婁昭君(武明皇后)、息子の高澄(原文は文襄)が、そろって高歓に対し、「阿那瓌の娘と結婚なさいますように」と進言したので、高歓はこれに従った。武定三年(五四五)、高歓は慕容儼を柔然に派遣し、阿那瓌の娘を娶ることとし、蠕蠕公主と名づけた。八月、高歓が蠕蠕公主を下館に迎えると、阿那瓌は弟の秃突佳を派遣して娘を東魏に送らせ、さらに高歓に対して贈物をおくり、秃突佳に対しても訓戒を与え、「外孫の誕生を見届けてから柔然に帰国するように」と言った。蠕蠕公主の性格は厳格で気が強く、生涯、中国の言葉を話さなかった。高歓が、かつて病気になる、蠕蠕公主の所に行けなかったとき、秃突佳が高歓を恨み、怒ったので、高歓は射擊部屋から病人用の輿に乗り、公主のもとに赴いた。高歓が公主を大切にすることは、このようであった。高歓が亡くなると、息子の高澄は柔然の国法に従って蠕蠕公主を娶り、一人の娘を生んだ。

・『北史』卷九八、蠕蠕伝

武定四年(五四六)、阿那瓌には愛娘がおり公主と称していたが、高歓の威光と徳が日ごとに盛況になってきたことを見て、また娘の公主を高歓に娶せたいと請願した。孝静帝はこれを聞くと高歓に勅書を下し、阿那瓌の娘を娶らせた。阿那瓌は、吐豆発の郁久閭汗拔や介添えの侍女らを派遣して娘を晋陽まで送らせた。この婚姻によって東魏と柔然の国境地帯では戦闘がなくなり、武定末(五五〇年頃)まで使者の朝貢が頻繁に行われた。

・『北齊書』卷九、神武明皇后婁氏伝（『北史』卷十四齊武明皇后婁氏伝は同文なので省略）

神武・高歓は柔然に圧迫されたので、柔然可汗の娘を娶って和睦したいと考えた。しかし決断しかねていると、妻の明皇后婁氏が「柔然との婚姻は国家の大計です。どうか躊躇なさいませぬように」と言った。柔然可汗阿那瓌の娘の茹茹公主（蠕蠕公主）が嫁いでくると、明皇后は正室を退き、公主を正室に住ませた。高歓が恥じ入り、心から詫びると、明皇后は「公主が察知しますから、わたしに構わないでください」と言った。³⁰⁾

・『資治通鑑』卷一五九、梁紀十五、武帝大同十一年（五四五年、東魏の武定三年）条

西魏と柔然の頭兵可汗阿那瓌が共謀して東魏の討伐を試みたので、東魏の宰相高歓は事態を憂慮し、行台郎中の杜弼を柔然に派遣して、後継ぎの高澄のために婚姻を請願した。すると阿那瓌は「高歓自身が娶るのであれば婚姻を許可しよう」と言った。高歓が悩んで決断できずにいると、妻の婁妃が「柔然との婚姻は国家にとっての大計です。躊躇してはなりません」と言い、息子の高澄と尉景も、高歓と柔然の通婚を勧めた。そこで高歓は鎮南將軍の慕容儼を柔然に行かせて阿那瓌の娘を娶り、蠕蠕公主と呼んだ。

(二) 吐谷渾との婚姻

(1) 吐谷渾の可汗夸呂の従妹が東魏の孝静帝に嫁ぐ（五四五年、武定三）

・『魏書』卷十二、孝静帝紀、武定三年（五四五年）条（『北史』卷五東魏孝静皇帝紀は同文なので省略）

東魏の武定三年（五四五年）二月庚申の日、吐谷渾国の王が東魏に対し、「吐谷渾王の従妹を奉りますので、後宮に入れていただきたい」と申し出たので、孝静帝は吐谷渾王の従妹を娶り、容華嬪となした。

・『魏書』卷一〇一、吐谷渾伝（『北史』卷九六吐谷渾伝は同文なので省略）

東魏の興和年間中（五三九～五四二）、高歓が宰相となり、遠方の国々を招き懐柔しようとした。柔然がすでに東魏に

帰順したので、夸呂も東魏に使者を派遣し、敬意を表した。高歡が大義を説いて吐谷渾を諭し、朝貢を求めたので、夸呂は使者の趙吐骨真を派遣し、柔然に道を借りて来朝させた。³¹⁾ また、夸呂が従妹を妃として薦めたので、孝静帝は夸呂の従妹を入内させて嬪となした。

・『資治通鑑』卷一五九、梁紀十五、武帝大同十一年（五四五年、東魏の武定三年、西魏の大統十一年）二月条

武定三年（五四五）二月庚申の日、東魏の孝静帝が吐谷渾の可汗の従妹を娶り、容華とした。

② 広楽公主（済南王匡の孫）が吐谷渾の夸呂に降嫁（五四五年（武定三）頃）

・『魏書』卷一〇一、吐谷渾伝（『北史』卷九六吐谷渾伝は同文なので省略）

武定三年（五四五）³²⁾、夸呂が従妹を妃として薦めたので、孝静帝は夸呂の従妹を入内させて嬪となした。…夸呂が、また東魏に婚姻を請願したので、孝静帝は済南王匡の孫娘を広楽公主となして夸呂の妻とした。この後、東魏に対する吐谷渾の朝貢は絶えなかった。

Ⅲ 西魏

西魏は、実は東魏よりも先に柔然と婚姻を結んでおり、文帝が阿那瓌の娘（悼皇后）を娶り、化政公主が柔然の塔寒（阿那瓌の兄弟）に降嫁して二重の婚姻関係を結んだ（系図参照）。その後、東魏が西魏と柔然の連合を恐れ、柔然および吐谷渾との間で通婚・連繫し西魏包囲網を構築したので、窮した西魏は、反柔然の新興国突厥に長楽公主を降嫁させ対抗した。

(二) 柔然との婚姻

(1) 阿那瓌の長女(悼皇后)が西魏の文帝に嫁ぐ〔五三八年、大統四〕

・『北史』卷十三、文帝文皇后乙弗氏伝

このとき西魏の文帝は新たに関中(長安)に都を置き、東に出撃して東魏を征伐したいと考えた。北方より柔然も襲来して辺境地帯を攻撃したが、文帝には北伐を行う余裕がまだなかったため、柔然と婚姻を結んで懐柔しようと考えた。そこで文皇后に代えて、改めて柔然出身の悼皇后を娶ることとし、文皇后に命じて別宮殿に移住させ、出家させて尼とした。しかし、悼皇后が文帝と文皇后の密通を疑ったため、文帝は再度、文皇后の住まいを秦州に移し、息子で秦州刺史の武都王を頼らせた。このように文帝は国家のため大計を決断したが、文皇后への恩義と愛情を忘れることもできず、その後、秘かに文皇后に命じて髪を伸ばさせ、還俗させようと企てた。しかし、この文帝の秘密は外部に漏れ、知らぬものはいかなかった。西魏の大統六年(五四〇)春、柔然が総力を結集して黄河を渡り、先発隊はすでに夏を通過した。柔然は悼皇后の由縁を理由にあげ、この戦争を始めたことと主張した。このため文帝は中常侍の曹寵を文皇后のもとに派遣して直筆の勅命を与え、文皇后を自殺させた。

・『北史』卷十三、文帝悼皇后郁久闐氏

文帝の妻、悼皇后・郁久闐氏は、柔然の可汗阿那瓌の長女である。…西魏の大統年間の初め(五三五年頃)、柔然が頻繁に北の辺境地帯を侵犯したので、文帝は阿那瓌と盟約を交わし、友好関係を築いて婚姻を結ぶことにした。扶風王の孚が、文帝より使者の任務を授かり、勅命を奉り、悼皇后を迎えるため出立した。柔然の風俗では東方を尊重したので、悼皇后は西魏にやって来ると、天幕を設ける際に扉や席を一樣にみな東の方角に向けた。柔然の一行の車は七百台、馬は一萬頭、ラクダは千頭で、黒塩池に到達した時、西魏の鹵簿や文物がようやく到着した。扶風王の孚は悼皇后に対し、

南に顔を向けて文帝からの勅書を受けるよう請願したが、悼皇后は「わたしはまだ西魏の皇帝にお会いしていませんので、柔然の娘です。西魏の兵士は南を向き、わたし自らは東に顔を向けて勅書を受けます」と言った。扶風王の孚は返す言葉がなかった。西魏の大統四年（五三八）正月、悼皇后が都に到着し、皇后に冊立された。このとき皇后は十四歳であった。

・『北史』卷九八、蠕蠕伝

西魏の文帝は、自らも阿那瓌の娘を娶って皇后とした。：阿那瓌が廢后（文皇后）のことを言うので、文帝はやむを得ず、勅書を下して廢后を自害させた。：東魏の興和二年（五四〇）春、阿那瓌は、また龍無駒らを派遣し東魏に朝貢させたが、まだ柔然の誠意は見られなかった。しかし、西魏の文帝の妻となっていた阿那瓌の娘（悼皇后）が病気で亡くなると、東魏の高歡は相府功曹參軍の張徽纂を阿那瓌のもとに派遣し、ひそかに説得して、「西魏の文帝と宇文泰は、孝武帝を殺害しましたが、その後、また、阿那瓌どのの娘御（悼皇后）も殺しました。そのうえ偽って、宗室の中でも遠縁の娘に公主の称号を与え、柔然に嫁がせて親族となりました。また、阿那瓌どのが黄河を渡って征西したとき、宇文泰は草を焼いて柔然の軍馬を飢えさせ、南に進軍できないようにしました。これらのことは西魏の裏切り、反逆、不義の実態なのです」と言った。また高歡は「東魏こそが北魏の正統なる後継者である」と論じ：さらに阿那瓌に対し、偽って、「：悼皇后は西魏にすでに殺され、西魏からのあしらいは欺瞞に満ちています。西魏の不仁、不信は、許しがたい。西魏を討伐すべきです」と言った。：阿那瓌は大臣を召して議論し、東魏に忠誠を誓うことにした。

・『資治通鑑』卷一五八、梁紀十四、武帝大同四年（五三八年）、西魏の大統四年）二月条

また、西魏の宰相宇文泰は文帝に対し、「乙弗皇后を廢し、頭兵可汗・阿那瓌の娘を妃として後宮に入れるように」と請願した。そこで西魏の大統四年（五三八）二月甲辰の日、文帝は乙弗皇后を尼となし、扶風王の孚に阿那瓌の娘を

迎えに行かせ、皇后とした。阿那瓌はついに東魏の使者元整を抑留し、使者としての任務について東魏に報告させなかった。

(2) 化政公主（元翌の娘）が柔然の塔寒（阿那瓌の兄弟）に降嫁（五三八年、大統四）

・『北史』卷九八、蠕蠕伝

東魏と西魏は、競って柔然の阿那瓌と通婚し友好関係を結ぼうとした。西魏の文帝は、孝武帝の時代に舍人の官職にあつた元翌の娘を化政公主と名づけ、阿那瓌の兄弟の塔寒の妻となし、また、文帝自らも阿那瓌の娘を後宮に入れて妃（悼皇后）とした。

・『資治通鑑』卷一五八、梁紀十四、武帝大同四年（五三八年、西魏の大統四年）条

初め、頭兵可汗・阿那瓌は柔然への帰国を果たすと、西魏に対し礼を尽くして仕えた。∴西魏の宰相宇文泰は、新たに関中（長安）に都を構えた。しかし、山東が、いままさに東魏との間で戦闘状態なので、宇文泰は柔然と婚姻を結んで怀柔したいと考えて、舍人の元翌の娘を化政公主となして、阿那瓌の弟・塔寒の妻とした。

(二) 突厥との婚姻、長楽公主が突厥可汗の土門に降嫁（五五一年、大統十七）

・『周書』卷五十、突厥伝（『北史』卷九九突厥伝は同文なので省略）

突厥は、柔然の臣下になった。そして金山（アルタイ山脈）の南に住み、柔然の鉄工職人となった。∴西魏の大統十二年（五四六）、土門はついに使者を西魏に派遣し、特産物を献上した。このとき鉄勒が柔然を攻撃しようとしたので、土門は配下を率いて鉄勒を迎撃して打ち破り、鉄勒の五万余の部落を降伏に追い込んだ。土門は強盛に自信を深め、柔然に求婚した。しかし、柔然の王阿那瓌はたいそう怒り、突厥に使者を送りつけると、土門を罵りはずかしめ、「おまえは柔然の鉄工奴隷のくせに、結婚したいなどと、身のほど知らずなことを、よく言えたものだ」と言った。土門も

また怒り、柔然の使者を殺すと、ついに柔然との友好関係を絶った。それと同時に、土門は西魏に求婚した。西魏の宇文泰は突厥への公主降嫁を許可し、大統十七年（五五二）六月、西魏の長樂公主を土門の妻とした。

・『資治通鑑』卷一六四、梁紀二十、簡文帝大宝二年（五五二年）、西魏の大統十七年 条

鉄勒が柔然を攻撃しようとしたので、突厥の酋長土門は鉄勒を迎撃して打ち破り、鉄勒の五万余の部落をすべて降伏させた。土門は強盛に自信を深め、柔然に求婚したが、柔然の頭兵可汗阿那瓌はたいそう怒り、人を派遣して土門を罵りはずかしめ、「おまえは、わたしの鉄工奴隷のくせに、こんな身のほど知らずなことを、よく言えたものだ」と言った。土門もまた怒り、柔然の使者を殺すと、ついに柔然との友好関係を絶ち、西魏に求婚した。西魏の宰相宇文泰は、長樂公主を土門の妻とした。

IV 北周

西魏と東魏の対立構図は北周と北斉にも継承され、北周と北斉は互いに敵手を凌駕せんと、競って突厥との婚姻同盟を画策⁽³³⁾し、北周の武帝が、突厥の木杆可汗の娘（阿史那皇后）を娶って皇后となした。

(二) 突厥の木杆可汗の娘（阿史那皇后）が北周の武帝に嫁ぐ〔五六八年、天和三〕

・『周書』卷五、武帝紀上、天和三年（五六八年）条（『北史』卷十周本紀下高祖武帝紀は同文なので省略）

天和三年（五六八）三月癸卯の日、皇后の阿史那氏⁽³⁴⁾が突厥より都長安に到着した。

・『周書』卷九、武帝阿史那皇后伝（『北史』卷十四周武成皇后阿史那氏伝は同文なので省略）

武帝の妻の阿史那皇后は、突厥の第三代可汗である木杆可汗・俟斤⁽³⁵⁾の娘である。突厥は柔然を滅ぼした後、塞表の地を尽く支配し、数十万の強兵を有し、中華を凌ぎたいと志を立てた。太祖の宇文泰は北斉と中国の覇権を争っていたの

で、突厥と婚姻を結んで援軍を獲得したいと考えた。木杆可汗は初め娘を北周の皇帝に娶せたいと考えたが、やがて後悔した。高祖武帝が即位すると、突厥に幾度も使者を派遣して婚姻の約束を交わしたので、木杆可汗は阿史那皇后を武帝に嫁がせることを許した。北周の保定五年（五六五）二月、武帝は、陳国公の純、許国公の宇文貴、神武公の竇毅、南陽安公の楊荐らに勅書を下し、阿史那皇后を奉るための贈物と仮宮殿、六宮以下の百二十人を揃えさせて、木杆可汗の天幕に行かせ、皇后を北周に迎えさせた。ところが木杆可汗は北斉に対しても婚姻を許し、二心を抱き始めた。このため陳国公の純は何年間も突厥に抑留され、北周に帰国して武帝に報告することができなかった。陳国公の純は木杆可汗に信義を説いたが、可汗は従わなかった。たまたま激しい雷や大風が起こり、木杆可汗の天幕を破壊し、雷と大風は十日ほど止まなかった。木杆可汗はたいそう恐れ、これは天罰だと考え、礼儀を尽くして阿史那皇后を北周に送ってきた。陳国公純らは仮宮殿を設け、羽儀の旗を並べ、皇后を奉って北周に帰還した。天和三年（五六八）三月、阿史那皇后が長安に到着したので、武帝は皇后の所に行き、親迎の礼を³⁶尽くして迎えた。皇后の容貌は美しく、武帝は深く敬愛した。

・『周書』卷五十、突厥伝（『北史』卷九九突厥伝は同文なので省略）

保定元年（五六一）、木杆可汗・侯斤は、また三回、北周に対して使者を派遣し特産物を献上した。このとき北周は北斉と互いに戦い、連年出動していたので、突厥と結べば外から援軍を得られると考えた。初め、西魏の恭帝の時代、木杆可汗は娘を北周の太祖宇文泰に妻として進呈することを許したが、婚約が決まらないうちに宇文泰が亡くなった。間もなく、木杆可汗はまた他の娘を高祖武帝に嫁がせることを許したが、結納を交わさないうちに北斉もまた使者を派遣して突厥に求婚した。木杆可汗は、北斉の手厚い贈物を貪りたいと考え、北周との婚姻を後悔し始めた。そこで武帝は勅書を下し、涼州刺史の楊荐、武伯の王慶らを突厥に行かせ、北周との婚姻を木杆可汗に結ばせることにした。王慶

らは突厥に赴き、信義をもって可汗を諭したので、木杆可汗もついに北斉の使者との交渉をやめ、北周との結婚を決めた。そして、木杆可汗は国をあげて北斉征伐を行いたいと請願した。：保定五年（五六五）、武帝は勅書を下し、陳国公の純、大司徒の宇文貴、神武公の竇毅、南安公の楊荐らを突厥に派遣し、木杆可汗の娘を北周に迎えさせた。天和二年（五六七）、木杆可汗はまた使者を派遣して北周に朝貢した。陳公の純らが突厥に赴いたとき、木杆可汗はまた北斉とも通じていたが、たまたま激しい雷や大風が起こったので、可汗は（天罰を恐れ）純らに対し、皇后（阿史那皇后）を北周に連れ帰ることを許したのであった。

・『資治通鑑』卷一七〇、陳紀四、臨海王光大二年（五六八）、北周の天和三年 条

突厥の木杆可汗は北周に対して二心を抱き、改めて北斉に婚姻を許し、北周の使者・陳公純らを数年間、突厥に留めて帰国させなかった。たまたま激しい雷や大風が起こり、可汗の天幕を破壊した。雷や大風は十日ほど止まなかった。木杆可汗は恐れ、天罰だと考え、すぐに礼を尽くして娘を北周に送り、陳公純らは木杆可汗の娘を奉って北周に帰還した。天和三年（五六八）三月癸卯の日、一行は長安に到着し、武帝は親迎の礼を行って可汗の娘を迎えた。

(二) 北周の千金公主が突厥の東面可汗猗罔(1)に降嫁（五八〇年、大象二年）

北周は静帝時代、千金公主（趙王招の娘）を突厥に降嫁させた。千金公主は、北周の滅亡後、隋の文帝よって大義公主に改封されたため、隋代の和蕃公主として別稿⁽²⁾で史料の訳注を行った。そちらを参照されたい。

注

- (1) 和蕃公主研究には日野開三郎「唐代の和蕃公主」(『東洋史学論集』第九卷、三一書房、一九八四年三月、初出は一九七八年)、小川昭一「和蕃公主の文学」(『花園大学研究紀要』巻一二、一九八一年)、崔明德「中国古代和親通史」(人民出版社、二〇〇七年)、藤野月子「漢唐間における和蕃公主の降嫁について」(『史学雑誌』一一七編七号、二〇〇八年)、藤野月子「五胡北朝隋唐期における和蕃公主の降嫁―その時代的特質との関連について」(『歴史学研究』八五五号、二〇〇九年七月)、藤野月子「王昭君から文成公主へ―中国古代の国際結婚」(九州大学出版会、二〇一二年)、拙稿「降嫁が成立しなかった和蕃公主の事例に見る唐代の外交関係」(『古代文化』七四巻一号、二〇一二年)、「王莽期の匈奴対策における王昭君一族の外交的活動」(『総合女性史研究』四〇号、二〇一三年)等がある。
- (2) 北魏および北朝については、川本義昭「中国の歴史五 中華の崩壊と拡大・魏晋南北朝」(講談社、二〇〇五年)、三崎良章「五胡十六国・新訂版」(東方書店、二〇一二年)、窪添慶文「北魏史」(東方書店、二〇一〇年)、松下憲一「中華を生んだ遊牧民―鮮卑拓跋氏の歴史」(講談社選書メチエ、二〇一三年)等を参照。
- (3) 柔然は、蠕蠕、茹茹とも記されるが、本稿では柔然で統一する。柔然については、内田吟風「柔然時代蒙古史年表」(『北アジア史研究―鮮卑柔然突厥篇』同朋舎、一九七五年)、周倬洲「敕勒与柔然」(広西師範大学出版社、二〇〇六年。初版は一九八三年)参照。
- (4) 北朝における和蕃公主の降嫁については、藤野月子「五胡北朝隋唐期における和蕃公主の降嫁」、藤野月子「王昭君から文成公主へ」。また西魏・東魏・北周・北斉と柔然・突厥との婚姻外交や公主降嫁政策については、拙稿「西魏・北周の対外政策と中国再統一へのプロセス」(『史窓』七〇号、二〇一三年)、拙稿「突厥・吐蕃・ウイグルが周辺諸国との間で展開した婚姻外交と東部ユーラシアの国際情勢」(『鷹陵史学』四四号、二〇一八年)等を参照。
- (5) 拙稿「漢代和蕃公主に関する諸史料の訳注―『史記』『漢書』『後漢書』『資治通鑑』より」(『京都女子大学大学院文学研究科研究紀要・史学編』二四号、二〇一五年)、「隋代和蕃公主に関する諸史料の訳注―『隋書』『周書』『旧唐書』『新唐書』『資治通鑑』より」(『立命館東洋史学』四七号、二〇一五年)、「唐代和蕃公主に関する諸史料の訳注―『旧唐

書』『新唐書』『資治通鑑』より」（『京都女子大学大学院文学研究科研究紀要・史学編』一三三号、二〇二四年）。

(6) 『魏書』『北史』蠕蠕伝については内田吟風氏の訳注、『魏書』吐谷渾伝、沮渠蒙遜伝については小谷仲男氏と筆者の訳注、『周書』突厥伝については山田信夫氏の訳注、『魏書』高麗伝については井上秀雄氏の訳注がある。内田吟風訳注「蠕蠕・芮芮伝（魏書・北史）」（『騎馬民族史一・正史北狄伝』平凡社、一九七一年）、小谷仲男・菅沼愛語「南朝正史西戎伝と『魏書』吐谷渾・高昌伝の訳注」（『京都女子大学大学院文学研究科研究紀要・史学編』十二号、二〇一三年）、小谷仲男・菅沼愛語「南北朝正史の沮渠蒙遜伝、氏胡伝、宕昌伝訳注」（『京都女子大学大学院文学研究科研究紀要・史学編』十三号、二〇一四年）、山田信夫訳注「突厥伝（周書）」（『騎馬民族史二・正史北狄伝』平凡社、一九七二年）、井上秀雄他訳注「高句麗伝（魏書）」（『東アジア民族史一・正史東夷伝』平凡社、一九七四年）。

(7) 例えば、烈帝の公主は前燕王慕容皝（元真）に降嫁し、遼西公主（昭成帝の娘）は鮮卑賀蘭部の族長賀野干に降嫁し、平帝の公主は賀訥（賀野干の子）に降嫁した。また、代国は前燕との間で二重の婚姻も交わしており、前燕王慕容皝に烈帝の公主が降嫁すると同時に、昭成帝が慕容皝の妹を娶って皇后とした。『魏書』巻一序紀昭成皇帝紀、巻十三昭成皇后慕容氏伝、巻八三賀訥伝。なお、本稿は紙幅の都合上、代国における公主降嫁や婚姻外交に関する諸史料の訳注を割愛する。

(8) 藤野月子氏は、道武帝が漢高祖による和蕃公主の降嫁政策に倣って北魏の公主降嫁を改制し、近隣諸国や来降者に対しては公主を降嫁するが、臣下への降嫁は行わなくなったこと、道武帝が改制によって帝権強化を図ったことなどを論考している。藤野『王昭君から文成公主へ』六一～七二頁。

(9) 『漢書』巻四三婁敬（劉敬）伝。婁敬は、公主を匈奴に降嫁させ、公主の生んだ子を单于となせば匈奴を臣従させることができると述べて、魯元公主（高祖と呂後の娘）の匈奴への降嫁を提言した。拙稿「漢代和蕃公主に関する諸史料の訳注」参照。

(10) 藤野月子氏は「賓附之國」への公主降嫁について検討し、道武帝が近隣諸国および近隣国から投降した者に対して、公主を降嫁させたと論じた。注（8）参照。本稿も、「賓附之國」の解釈については藤野氏の説も踏まえ翻訳を試みた。

- (11) 『北史』卷二〇閻大肥伝では、華陽公主と記される。華陰（華陽）公主は道武帝と皇后劉氏の娘であり、明元帝の同母姉である。『魏書』卷十三道武宣穆皇后劉氏伝。
- (12) 赫連昌は、夏の初代皇帝赫連勃勃の息子。四二七年、北魏軍が夏の都万城を占領し、赫連昌は捕縛された。
- (13) 呉提は勅連可汗と称し、在位は四二九年～四四四年。太延二年（四三六）北魏を攻め、太延五年（四三九）太武帝の北涼遠征時も北魏を攻撃した。『魏書』蠕蠕伝『資治通鑑』卷一一三。
- (14) 太武帝は北涼に攻め入るにあたって、沮渠牧犍の罪十二条を述べ立てた。
- (15) 『資治通鑑』卷一二五、元嘉二十四年（四四七年、太平真君八年）条に拠る。
- (16) 『魏書』卷四世祖紀、太延五年（四三九年）の条に「楊保宗を征南大將軍・秦州牧・武都王となした」と見えるので、楊保宗への公主降嫁も太延五年と推定される。
- (17) 『魏書』卷四世祖紀、太平真君四年（四四三年）の条に「夏四月、武都王の楊保宗が謀反を起こしたので諸將が捕えて平城に送り届けた」とある。
- (18) 原文の「繼好息民」は、『春秋左氏伝』隱公七年の言葉。
- (19) 予成は呉提の孫。在位は四六四年～四八五年。宋にも頻繁に遣使し、斉と連繫して北魏挾撃も画策した。
- (20) 『儀礼』の土昏礼によれば、婚姻を結ぶ際、納采、問名、納吉、納徵、請期、親迎の六つの儀礼を行った。藤野月子「和蕃公主の降嫁における婚儀の實態」（『東方学』第一二四卷、二〇一二年）参照。
- (21) 高句麗の二十代目の王で、長寿王と称す。在位は三九四年～四九一年。
- (22) 北燕王馮文通の娘は太武帝に嫁いでいたが、太武帝が北燕を攻撃したため、文通は高句麗に亡命し、北燕は滅亡した（四三六年）。それゆえ、高句麗王は、通婚しても北魏の高句麗攻撃を阻止できないと判断したのである。
- (23) 予成は、孝文帝に求婚した翌年の建元元年（四七九）十餘万の軍勢を率い北魏の辺境地帯を襲撃した（『資治通鑑』卷一三五）。予成は南朝と連合して北魏を攻撃する方が有利と判断し、北魏との通婚を止めたのかも知れない。
- (24) 阿那瓌の可汗号は、勅連頭兵豆伐可汗。在位は五二〇年～五五二年。阿那瓌は、東魏と西魏の対立も利用して勢力を

- 拡大した。長女は西魏文帝の皇后、次女の蠕蠕公主は高歡の妻、孫娘の隣和公主は高湛（高歡の子）の妻となった。
- (25) 隣和公主の墓は河北省磁県で発掘され、墓誌も出土した。墓誌によれば、公主は武定八年（五五〇）十三歳で死去した。板橋暁子「高歡に嫁いだ茹茹公主の処遇をめぐる諸問題」〔『中国出土資料研究』二八号、二〇二四年〕六八頁。
- (26) 氣賀澤保規監修、池田恭哉他訳『中国史書入門・現代語訳・北齊書』（勉誠出版、二〇二二年）一一六～一一七頁で、『北齊書』武成帝紀の該当箇所が翻訳されている。
- (27) 蠕蠕公主の墓誌も出土しており、墓誌によれば公主は武定六年（五四八）十九歳で死去した。板橋暁子「高歡に嫁いだ茹茹公主の処遇をめぐる諸問題」。
- (28) 高澄は、北齊時代に文襄帝と追尊された。
- (29) 匈奴・突厥などの北方遊牧民族には、父兄が死去すると息子や兄弟が継母や兄嫁を娶るレヴィレート婚の風習があった（『周書』突厥伝）。柔然でも同様の婚姻習俗が行われていたと考えられる。なお、松下憲一氏は、高澄は柔然との同盟を維持するため蠕蠕公主と再婚したと考察する。松下『中華を生んだ遊牧民』二〇九頁。
- (30) 氣賀澤保規監修『中国史書入門・現代語訳・北齊書』一四六頁参照。
- (31) 吐谷渾が柔然に道を借りて東魏に朝貢したのは、五四〇年（東魏の興和二年）。『資治通鑑』卷一五八、梁紀十四、武帝大同六年（五四〇）条に「この年、吐谷渾の夸呂が初めて柔然に道を借りて東魏を訪れた」とある。
- (32) 孝静帝が夸呂の従妹を娶った年は武定三年（五四五）。『魏書』卷十二孝静帝紀。
- (33) 北周も北齊も、突厥の支援を得るため競って贈物をし、可汗の歡心を買わんと腐心したので、佗鉢可汗から「南に二人の孝行息子（北周と北齊）がいれば、突厥に物不足の心配はない」と揶揄された（『周書』卷五十突厥伝）。
- (34) 阿史那是突厥可汗の姓。『周書』突厥伝に「突厥の姓は阿史那氏である」とある。
- (35) 名前は俟斤、可汗号は木杆可汗。在位は五五三年～五七二年。
- (36) 婚姻のための六礼の一つで、新郎が新婦を迎えに行く儀式。注（20）参照。
- (37) 拙稿「隋代和蕃公主に関する諸史料の訳注」一一一～一一三〇頁。